

グリーンサイエンス21便り (16)



コロナ禍の下での、ささやかな楽しみ

坂本 弘道 (ささかもと ひろみち) Ⅱ

NPO法人グリーンサイエンス21理事長

冬の間、屋内に避難していた植木や草花を、一斉に戸外に出した。月下美人は長年、我が家に住み着き、今では7鉢になった。若い芽が伸びだした。6月から9月のある日、夕闇とともに、申し合わせたように、強烈な香りと共に、妖精のような真っ白い花を開く。たった一晚の命だが、精一杯の咲きぶりだ。

スパティフィラムも、いつの間にか14鉢になり、一斉に蕾を付けた。どれも連絡を取り合ったようで、正直だ。パキラの木に、ぶら下げた洗ったマスクと、白を競っている。

観音竹は冬の間も、北風の当たる玄関わきに置いていたが元気だ。新しい葉も出てきた。数年に一度、赤い珊瑚のような不気味な花を付ける。その時は早めに思い切って切らないと、全体が枯れてしまう。竹の花が咲くと、その株全体が枯れるという。生きている最後の華やかさなのだろうか。植物の世界は不思議なことが多い。

春先には、クリスマスローズだ。

て、2本が、30本に増え、18本が咲いた。この場所が、居心地良いらしい。農家から購入した春蘭は、今年も花を付けた。地味だが、奥ゆかしい花だ。

暮れに、正月用にと求めたベコニアは、5月も終わろうとしているのに、いまだに花を付けている。咲き終わった茎の間から、新たな葉が出てきて、徐々に大きくなってきた。

山椒は、暖かくなるとともに若芽が伸びだし、若葉がすまし汁や若竹煮に香りを付けてくれる。花が咲いた後、いつの間にか緑の実を一杯付けた。丁寧に一粒づつ採って、さつとゆで、醤油に漬けた。



山椒醬油の出来上がりだ。購入した「ちりめんじゃこ」に日本酒と、この醬油を入れ煮詰めると、立派な「山椒ちりめん」が仕上がった。熱々の飯に、もってこいだ。

種の飛び散った桜草が、早春の庭のあちこちで花を付け、彩を樂しませてくれた。そろそろ、おしまいだ。それと引き換えに、いたるところで青紫蘇の大葉の芽が出た。プランターに植え替えた。瞬く間に、大きな葉に成長している。これからしばらく、わが家の食卓で活躍する。ミニトマトと唐辛子、ピーマンも植え付けた。

きず菜の種は、これから蒔くことにする。昨年は大きく育った。